

東シナ海でのタンカー衝突事故による海洋汚染について

2018年1月6日に東シナ海でタンカー衝突事故が起こりました。積み荷はコンデンセート約13.6万トンです。そして、残燃料油がA重油・約120トン、B重油・約2,000トンあったとのことです。

この事故について、ネットでは注目を集めたものの、国内のマスメディアでは小さな扱いしかありません。だから、社会問題に关心のある方でも知っている人は少ない状態です。

コンデンセートとは、天然ガスを採取する時に地表で凝縮分離した液状炭化水素で、石油化学原料として使われます。非常に揮発性が高いため、環境への影響は低いとする楽観論があります。しかし、コンデンセートが燃え尽きる前に船が沈んだ場合、海中に漏れ続けた上に、可溶性があるために、海洋汚染を引き起こす可能性があります。

燃料の重油については、奄美大島やトカラ列島の宝島などに漂着しています。奄美大島に住んでいる方の報告によれば、海上保安庁や自治体よりも民間業者の動きが速かったです。

タンカー衝突事故の当事者のサンチ号・CFクリスタル号の双方とも保険に入っています。保険会社から速やかに現場での作業を落札した日本サルヴェージ社とソーワエンジニアリング社が現場での回収作業を取り仕切っています。

自治体や地元住民は「被害者として賠償を求める側」、業者は「保険会社の受託で加害者サイドの賠償を支払う側」の違いがあり、業者は情報開示をしません。だから、「現場にはたくさんの作業員がいるけど、彼らについて、行政は知らない。聞いていない。誰だろう」といった事態が起こっています。

環境省が3月1日に水質モニタリングの結果を発表しました。これによると「環境基準を超える項目はなかった」となっています。しかし、環境への影響は長期的な視点で見なければなりません。

3月7日の時点で、奄美大島は大分片付いてきていて、峠を越えた感じがあります。しかし、まだまだ油の漂着は続いています。そして、宝島など離島では人手が足りていないそうです。(永瀬ユキ)

映画「チャルカ」を観て

1月20日、アイム立川にて映画「チャルカ」の鑑賞会を実施しました。「チャルカ」とは「糸車」を意味しており、因果の巡り、すなわち私たちが直面している原発事故も、糸車のように過去の行いが巡り戻ってきてることを表現しています。核のゴミ処分問題に切り込んだドキュメンタリー映画で、廃棄物処分研究施設がある北海道幌延町の隣町で酪農を営む久世さん一家を中心に、フィンランドで建設中の地下処分施設（オンカロ）等を取材し、エネルギーや生き方の在り方について疑問を投げかけていました。

【印象的だった日本とフィンランドの違い】

フィンランドのオンカロに対する取材も本作の大きな要素でしたが、日本との違いが印象的でした。オンカロに対する考え方は現地においても賛否両論で複雑なものがあつたのですが、施設側は丁寧に説明を尽くし、情報公開に対しても非常にオープンなスタンスに見えました。このことは、隠ぺいや改ざんがまかり通る今の日本と非常に対照的でした。原発政策を推進していることは言うに及ばず、透明性や情報公開についても最低限度の責任すら果たしていない今の日本政府に対する強い憤りを改めて感じます。

(山本ようすけ)